

第50号

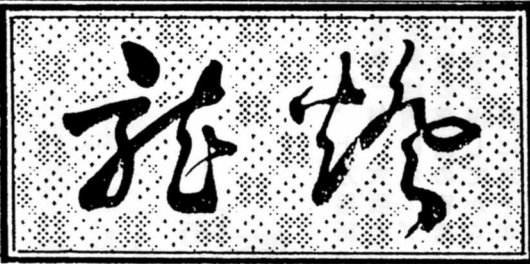
発行所

大阪市史跡 龍溪禪師墓所 雲竜山九島院
〒550-0022 大阪市西区本田3丁目4番18号
TEL 06(6583)2725 FAX 06(6583)0908

発行者

第二十五世住職 奥田啓知(智證)

お寺が栄えることは檀信徒の皆様のご喜びであり



団塊定年

定年後の人生設計とは？

戦後の高度成長を支えた世代（一九四七～一九四九年生まれの団塊の世代）が、二〇〇七年以降、毎年、大量に退職ラッシュを迎えます。

この団塊定年が社会問題となるのは、技術継承、労働力不足、年金破綻、熟年離婚など、さまざまな影響を与えるからです。

夫の定年を機に妻が離婚を申し出る熟年離婚を題材としたテレビドラマ「熟年離婚」（テレビ朝日）が平均視聴率一九・二％の高視聴率を稼ぎました。

また、年金分割制度改正（平成十九年四月一日施行）にともない、離婚後に夫の年金の半分を手にとることとなり、結婚二十年以上の熟年夫婦の離婚が急増すると見られており、二〇〇七年問題に対する関心の高さが表れた格好だといえます。

熟年離婚にいたらないまでも、「主人在宅ストレス症候群」という病気が問題となつています。定年になった夫が常に家にいるようになったことで、妻が強いストレスを感じ、体に変調を

をおこし、高血圧、胃潰瘍、肝機能障害など、さまざまな症状となつて現れるそうです。

二〇〇四年の統計では日本人の平均寿命は男子七十八・六歳、女子八十五・五歳です。六十歳定年後、十八年、二十五年という余命をいかに生きるか、それはますます社会の大きなテーマなのです。

「八大人覚経」というお経のなかに、「多欲は苦なり、生死の疲労は貪欲より起こる、生死にして無為なれば身心自在なり」と覚知せよ」（欲望が多いことはつらいことである。一生の間はさまざまな疲れは、すべて物事に執着し、むさぼることによつて起こる。多くを望まぬ心を常に保つことによつて、心身とも安らかに自由であることを、はつきり知ることである。）とあります。

定年後は、今までと同じ条件では生きられないのです。年相応に体力は衰え、記憶力も衰えてきます。このことを認めなければなりません。

「無為」とは何もしないことではなく、あるがままの姿を、あるべき姿として受け取っていくことなのです。

ただむなしいと嘆き悲しむのではなく、一人の人間として、何かに打ち込んでいくことが大事なのです。なにか「世のため人のために自分を与える」という考えをもち、生きていくべきではないでしょうか。

昨今の世情不安のなかでは、犯罪や事故、災害に巻き込まれ、あつと言う間に死んでしまい、自分の意とする死に方が選べないことが多いものです。

人生の最後には、必ず「死」がやってきます。人間としての生き方、いいかえれば「納得のいく死に方」「大往生」のことを考えれば、ボヤボヤしてはおれないのです。

「身心自在なりと覚知せよ」とは、そうした生き方こそが「大往生」につながるのですから。



